

インテリジェンス研究所

第24回諜報研究会

2018.10.6

東方社研究のこれまでとこれから—井上編著『秘蔵写真 200 枚でたどるアジア・太平洋戦争—東方社が写した日本と大東亜共栄圏—』の紹介を兼ねて—

井上祐子

はじめに

<東方社とは>

1941年春に陸軍参謀本部の下に結成された写真宣伝物制作団体、当初は対ソ連宣伝を目的とする
1945年5～6月に東部軍管轄下に移管、同年7月に解散するが、その後も有志によって業務継続
1945年10月頃に後継団体として文化社発足(第1次文化社～46年末頃、第2次文化社～47年末頃)
主な制作物～対外向けグラフ雑誌『FRONT』(1942年創刊、全10冊)

<本報告のテーマ>

2011年から、(公財)政治経済研究所において、東方社の写真ネガの整理・研究を開始
写真ネガの発見・整理により、東方社研究にどのような変化があったのか、今後どのような研究の可能性があるのかを、これまでの東方社研究を踏まえて検討する。

I これまでの東方社研究

A 東方社元社員・関係者の証言・回想類(東方社に関する記述を含む主なもの)

1 『FRONT 復刻版』刊行(1989～90年、平凡社)以前のもの、『FRONT』研究以外の脈絡から出てきたもの

① 中島健蔵(理事、1943年初頭～第1次文化社)

「参謀本部日記」(『文藝春秋』31巻18号、1953年12月)

「戦争と文化と抵抗と—参謀本部の裏街道—」(『文学界』10巻8号、1956年8月)

『昭和時代』(1957年、岩波新書)

『回想の文学5 雨過晴天の巻 昭和17-23年』(1977年、平凡社)など

② 山室太柁雄(編集部在籍、1944年春頃入社?～第1次文化社)

「東方社のことなど」全11回 『思想経済』1967年10月号～1968年9月号

(『思想経済』1968年1～2月号欠号により「東方社のことなど」(4)～(5)未見)

～東方社の組織や業務についての記載は少ない、東方社の雰囲気は伝えるが戦後の方に重点

③ 濱谷浩(写真部在籍、1941年7月～42年末)

『潜像残像』(1971年、河出書房新社←『東京新聞』の連載1970.7.14～10.13)～濱谷の自叙伝

『潜像残像—写真体験60年—』(1991年、筑摩書房)～前著の増補版

④ 菊池俊吉(写真部在籍、1941年9月～第2次文化社) / 林重男(写真部在籍、1943年初夏?～第1次文化社)

～1945年10月の原爆被害写真の撮影に関連して東方社に言及、軍事関係雑誌などにも写真発表

「反核・写真運動」編『母と子でみる 原爆を撮った男たち』（1987年、草の根出版会）
菊池俊吉「写真家をめざした頃」 *菊池・林は「反核・写真運動」（1982年結成）のメンバー
林重男「軍隊を終えカメラマンに」、「敗戦とアメリカ」
多川精一「幻のグラフ雑誌」
林重男『爆心地ヒロシマに入る—カメラマンは何を見たか—』（1992年、岩波ジュニア新書）
*菊池俊吉戦車写真集
菊池俊吉撮影／戸田万之助編集『日本陸軍写真集1 機械化部隊の主力戦車』（1994年、グリーンアロー社）
菊池俊吉撮影／北川誠司解説『鋼鉄の最新鋭部隊 千葉戦車学校・騎兵学校』（2008年、大日本絵画）
同『大陸の機甲戦闘演習 満洲公主嶺・代々木・銀座』（2009年、大日本絵画）

⑤林達夫（第3代理事長、設立時～1945年4月）

谷川徹三宛と岩波茂雄宛の当時の手紙の中で、東方社について言及
谷川徹三宛～『林達夫著作集 別巻1 書簡』（1987年、平凡社）
1945年3月14日、4月4日、5月5日、9月26日
岩波茂雄宛～岩波書店編集部『岩波茂雄への手紙』（2003年、岩波書店）
1943年9月9日～当時の東方社の状況に関する重要な資料⇒資料①

⑥恒石重嗣（参謀本部第2部第8課所属、連絡将校）

『心理作戦の回想—大東亜戦争秘録—』（1978年、東宣出版）
～東方社に関する記載は少ない
*国司羊之助のメモ（1944.1.10～45.10.15、東方社総務部在籍）
恒石及び斎藤（参謀本部からの連絡員）の名前が散見される
*別所弥八郎の証言（東方社写真部在籍、「第6回札幌民衆史講座」1990.11.11）
大陸打通作戦従軍時に、恒石からの支那派遣軍総司令官畑俊六宛など密書4通を預かる

2 多川精一の研究と『FRONT 復刻版』

①多川精一（美術部在籍、1942年1月～第2次文化社）～元社員からの聞き取り、資料収集
『戦争のグラフィズム—回想の『FRONT』—』（1988年、平凡社）
～『FRONT』を軸に東方社・文化社を通しての組織・業績の概略、東方社研究の土台
『戦争のグラフィズム—『FRONT』を創った人々—』（2000年、平凡社ライブラリー）
『焼跡のグラフィズム—『FRONT』から『週刊サンニュース』へ—』（2005年、平凡社新書）

②多川精一監修『FRONT 復刻版』解説Ⅰ～Ⅲ（1989～90年、平凡社）に掲載された記事

元社員の記録・証言

編集部…山室太柁雄（Ⅱ）、三神勲（Ⅲ）、中野菊夫（Ⅲ）、海老原光義（Ⅲ）

美術部…多川精一（Ⅰ～Ⅲ）、今泉武治→『日記』1942—43（Ⅱ）

写真部…菊池俊吉（Ⅱ）、浅野隆（Ⅲ）

元社員以外

山口昌男、柏木博、飯沢耕太郎（以上Ⅰ）、岡田一男（岡田桑三子息、Ⅱ）、天野祐吉（Ⅲ）

B 研究者・評論家等の研究

『FRONT』研究を中心にして、問題関心が変化しながら拡大し、研究が多層化した

1 『FRONT』の解読・分析…1980～90年代

～『FRONT』の図像・表現方法に着目し、『FRONT』を読み解く

原弘のグラフィックワークを中心に、プロパガンダ雑誌としての視覚表現の技術进行分析・評価
草森紳一～「生き神様の住む国のグラフィズム」(『写真装置』5、1982年6月)

柏木博～「死への恐れ=『FRONT』」(『写真装置』5→『欲望の図像学』、1986年、未来社)

「戦争のグラフィズム 対外宣伝雑誌『FRONT』のデザイン」(『月刊百科』1985年2月号、6月号→『肖像のなかの権力』、1987年、平凡社)

『FRONT』復刻版解説Iの柏木論文、飯沢論文、多川論文

多川精一『戦争のグラフィズム—回想の『FRONT』—』(1988年、平凡社)

特集「戦時下のアヴァンギャルド」(『すばる』12巻10号、1990年10月)など

2 東方社社員個人の半生や前後の仕事との関連の中で東方社や『FRONT』を位置づける…2000年代

川崎賢子・原田健一『岡田桑三映像の世紀—グラフィズム・プロパガンダ・科学映画—』(2002年、平凡社)

～実作の技術者ではないプロデューサーという職能に着目し、東方社初代理事長岡田桑三の業績を再評価、その中で『FRONT』にも言及し、視覚表現だけでなくテキスト・論理からも分析

川畑直道『原弘と「僕達の新活版術」—活字・写真・印刷の一九三〇年代—』(2002年、DNP グラフィックデザイン・アーカイブ)

～原弘の1930年代の業績をたどり、そこから原の仕事としての『FRONT』を再評価

井上祐子「太平洋戦争下の報道技術者—今泉武治の「報道美術」と写真宣伝—」(『立命館大学人文科学研究所紀要』75号、2000年11月)⇒資料②

～今泉武治の日記を主要資料として、戦時下の今泉の業績を再評価し、東方社についても言及
今泉の東方社での活動期間は1942年1月～43年10月、44年2月まで無給嘱託として籍有り

3 グラフ雑誌・「報道写真」研究の中での東方社および『FRONT』の位置づけ・評価…2010年前後

井上祐子『戦時グラフ雑誌の宣伝戦—十五年戦争下の「日本」イメージ—』(2009年、青弓社)

～主に戦時下の新聞社発行の対外向けグラフ雑誌を検討

→それらとの比較の中で『FRONT』の位置づけや役割を検討

白山真理『<報道写真>と戦争 1930—1960』(2014年、吉川弘文館)

～多様な写真関係雑誌を主要資料として、「報道写真」について検証

東方社については、空襲被害写真と原爆被害写真についてとりあげる

II (公財) 政治経済研究所における「東方社コレクション」の共同研究について

1 「東方社コレクション」とは

①「青山光衛氏旧蔵東方社・文化社関係写真コレクション」(「東方社コレクション」、政経研所有)

「東方社コレクション」～文化社社屋に残されていた東方社・文化社関係のネガフィルム約17500コマ

- a 東方社・文化社のカメラマンが、東方社・文化社の業務として撮影したもの
- b 東方社・文化社のカメラマンが、東方社・文化社以外の業務で撮影したもの
木村伊兵衛～中央工房・国際報道写真協会時代に撮影したもの
光墨弘～陸軍宣伝班に徴用された際に、陸軍の報道班員として撮影したもの
- c 東方社・文化社以外の撮影と思われるもの～参謀本部からの提供？
広東（空襲被害）／英領マレー（ペナン訓練所など）／ニューブリテン島／ジャワ
2011～13 年度「戦争末期の国策報道写真資料の歴史学的研究—国防写真隊と東方社を中心に—」
(JSPS 科研費 基盤研究 C 課題番号 23520853) において整理

②東方社元カメラマンのご遺族所蔵ネガフィルムの整理

- a 「林重男氏旧蔵東方社・文化社関係写真コレクション」（「東方社コレクションⅡ」、政経研所有）
…約 9700 コマ
- b 別所弥八郎氏ご遺族所蔵ネガフィルム…約 870 コマ
- c 菊池俊吉氏ご遺族所蔵ネガフィルム（空襲被害関係＋戦後の生活に関わるもの）…約 2300 コマ
2014～16 年度「戦中・戦後の「報道写真」と撮影者の歴史学的研究—東方社カメラマンの軌跡—」
(JSPS 科研費 基盤研究 C 課題番号 26370810) において整理

①②の整理～ネガをデジタル化し、各担当者が各ネガについて情報整理や調査を行う

①②の整理と並行して、ご遺族・関係者への聞き取り・資料調査を実施

濱谷浩の資料（撮影ノート、文書類）、『思想経済』などを発掘

東方社の組織や『FRONT』以外の制作物の解明に関わる有力な資料は発掘できず

2 共同研究およびその後の研究の成果物

- ①研究成果報告書～ネガリストの作成と解題の執筆、ネガリスト＝データの整理
いずれも公益財団法人政治経済研究所附属東京大空襲・戦災資料センター発行
井上祐子ほか『アメリカ軍無差別爆撃の記録写真—東方社と国防写真隊—』（2012 年）
山田昌彦ほか『東方社と日本写真公社の防空・空襲被害写真』（2013 年）
井上祐子ほか『戦中・戦後の記録写真—「東方社コレクション」の全貌—』（2014 年）
井上祐子ほか『空襲被害を撮影したカメラマンたち—東京空襲を中心に—』（2017 年）
井上祐子ほか『戦中・戦後の記録写真Ⅱ—林重男・菊池俊吉・別所弥八郎所蔵ネガの整理と考察—』
(2017 年)

②論文・研究ノート

井上祐子「別所弥八郎とアジア・太平洋戦争末期の「報道写真」—大陸打通従軍関連写真を中心に—」（『立命館法学』345・346 号、2013 年 3 月）

井上祐子「文化社撮影写真の特質と意義—敗戦直後の写真とその利用をめぐって—」（『政経研究』106 号、2016 年 6 月）

原田健一「映像アーカイブを使った比較研究—「東方社コレクション」を使ったレッスン—」（『政経研リサーチペーパー』24 号、2017 年 3 月）

～映像分析の新しい研究概念とその手法を探る試み→異なる映像データベースの比較

「映像メディアが「写すものと写されるもの、その映像を見るもの」という三者の関係性をパー

ソナル・コミュニケーションとマス・コミュニケーションとの間のなかで幾通りにも関係性を重層化させながら、さまざまな表現のあり方、手法を生み出している様態を分析した。」(37頁)

映像をマス・コミュニケーション化する際に起こる現象・問題に注意すべき

「映像がマス・コミュニケーション化されることは、こうした映像の多層的・多義的な構造がより拡大化し、多くの人びとがさまざまな解釈をすることをより広げ、拡大する」(34頁)

井上祐子「東方社2万枚のネガにみる戦争と社会」(『政経研究』108号、2017年6月)

③写真集・写真を主体とする書籍

NHK スペシャル取材班／山辺昌彦『東京大空襲—未公開写真は語る—』(2012年、新潮社)

東京大空襲・戦災資料センター編『東京空襲写真集—アメリカ軍無差別爆撃による被害記録—』(2015年、勉誠出版)

山辺昌彦・井上祐子編『東京復興写真集 1945～46—文化社がみた焼跡からの再起—』(2016年、勉誠出版)

井上祐子編著『秘蔵写真 200枚でたどるアジア・太平洋戦争—東方社が写した日本と大東亜共栄圏—』(2018年、みずき書林)

～II-1の①②の共同研究をもとに編集、「東方社コレクション」・「同II」のアウトラインの紹介

3 井上編著『秘蔵写真 200枚でたどるアジア・太平洋戦争』における試みと成果

ネガ～宣伝物のストーリーに組み込まれる前の写真

宣伝物になった時に断ち切られる撮影時の前後のつながりや情報が見える

本書の試み～何に着目し、どんな方向性でマス・コミュニケーション化しようとしたのか

写真そのものを歴史の資料・記録として活用する試み

写真の固有の意味＝写真に写っている人や場所やものがもつ歴史的意味に着目して、掘り下げる

→時・場所の特定の必要⇔特定・推定の困難←文字資料の少なさ

文字資料を補うもの～写真の中の情報(文字、徽章・腕章類、看板・宣伝物類、建造物等)

当時の報道(新聞、雑誌、ニュース映画)

関係機関・研究者・参考文献からの情報

成果・発見

①写真では見えない歴史と写真に写るものを重ね合わせる

写真に写るものを糸口として、人・場所・もの・事柄に埋め込まれた歴史を描く

～写真の背後にある歴史を描くことで、写真と歴史の双方の肉付けをはかる

ネガという一連の写真群とその他の資料の突合せで可能になる

ex.銀座「ミラテス」、神奈川県警察練習所の留学生(南方特別留学生)

②中国・東南アジアの写真、在日・来日外国人の写真について

海外取材の写真～観光客的な視線+宣伝物制作の視線

a 宗教関連の写真の多さ～宗教宣撫、宗教工作

イブラヒムの葬儀～「イブラヒム翁葬儀写真帳」(参謀本部から大日本回教協会へ寄贈)

(早稲田大学イスラーム地域研究機構「大日本回教協会旧蔵写真データベース」)

海外の各教会・宗教関係施設（学校）・海外神社など

b さまざまな捕虜・投降兵の姿

オーストラリア兵～チャンギー収容所の捕虜たち

インド兵～インド国民軍

フィリピン兵～フィリピン警察官訓練所

中国兵～中国現地での労働、元捕虜の日本での労働（中華民国興亜建設隊）

c 当時の日本と現地の認識・関心のズレ、現在の研究関心とのズレ

当時の現地で関心がもたれていたことと日本の関心のズレ

東方社と現地の新聞（『朝日新聞』華北版、『マニラ新聞』）では取材されているが、内地では報道がない、あるいは非常に少ないもの

ex. 中国の新民会・青少年の活動、フィリピンの警察官訓練所など

忘れられたこと・忘れられた人の再認識・再発見

ex. ムハンマド・アミン～東京モスクの第3代イマーム（1943～50）

諭熙傑～新民会副会長、新民青少年団副統監、明治大学に留学経験あり

③時・場所の特定→被写体の限定・特定→被写体の側の資料へのアクセスの可能性

ex. 青木哲郎のアルバム

～撮影時の情報、写された側にとっての写真の意味、写真をとりまく関係性

Ⅲ 東方社研究のこれから

「東方社コレクション」の今後の利活用＋関係資料の発掘、所在がわかっているネガ等の整理

①各写真および写真群の資料としての活用

各写真群に関係する機関や研究者との連携→ネガの情報の精度を高め、ネガの解読を深める

写された人の資料の発掘→写真に関する情報の収集、写真を取りまく関係性を考える

宣伝物との照合・比較

②コレクション全体の利活用～原田健一氏の試み・提案

「東方社コレクション」と他のコレクション（写真関連、『日本ニュース』など）・資料群との比較

～コレクション相互の内容や意義の再確認、新たな発見→各研究領域に生かす

～参謀本部を含めた為政者側の宣伝担当者や制作者たちの技術・戦略・思想などを検証

まとめにかえて

1 メディア史研究の領域における資料の形態の変化→その整理と研究の手法の模索

「東方社コレクション」の共同研究、井上編著『秘蔵写真 200 枚でたどるアジア・太平洋戦争』

その試行錯誤の一つ～東方社の写真そのものを評価し、歴史の資料として活用する試み

2 アジア・太平洋戦争期の「戦争遺産」をいかに活用するのか

さまざまな種類・形態・特徴をもった「戦争遺産」の発見・収集が進む中で、資料としての基本的な情報が欠如しているものをどう活用するのか、その研究・利用の方法を考える必要がある